

2026 年 7 月 12 日

主日礼拝

礼拝讃美歌⇒198 番 (SK 姉)

『イエスは来たもう』

聖書⇒哀歌 3 章 22~25、31~33 節 (MM 姉)

『主の慈しみは絶えることがない。／

その憐れみは尽きることがない。

それは朝ごとに新しい。／

あなたの真実を尽きることがない。

「主こそ私の受ける分」と私の魂は言い／

それゆえ、私は主を待ち望む。

主は、ご自分に希望を置く者に／

ご自分を探し求める魂に恵み深い。

主はとこしえに拒まれることはない。

たとえ苦しみを与えても／

豊かな慈しみによって憐れんでくださる。

人の子らを辱め、苦しめるのは／

御心ではないのだから。』

(祈り)

礼拝讃美歌⇒10 番

『イエス君の血にて』

聖書⇒エゼキエル書 16 編 6、22 節 (KT 姉)

『私は傍らを通りかかり、血の中でもがいているあなたを見て、

血まみれのあなたに、『生きよ』と言った。

あなたは、あらゆる忌むべきことや淫らな行いをしているとき、
裸で何も着ずに、血の中でもがいていた自分の幼い日々を思い起こすことはなかった。』

(祈り)

礼拝讃美歌⇒51 番 (KH 兄)

『げに数ならず』

《パン裂き》

聖書⇒1 コリ 11 章 23~26 節 (KH 兄)

『私があなたがたに伝えたことは、私自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りを献げてそれを裂き、言われました。「これは、あなたがたのための私の体である。私の記念としてこのように行いなさい。」食事の後、杯も同じようにして言われました。「この杯は、私の血による新しい契約である。飲む度に、私の記念としてこれを行いなさい。」だから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲む度に、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。』

(式)

礼拝讃美歌⇒142 番

『渡されたもう』

《建徳》

聖書⇒創世記 3 章 1~6a, 7, 8~9, 15 節 (KT 姉)

『神である主が造られたあらゆる野の獣の中で、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「神は本当に、園のどの木からも取って食べてはいけないと言ったのか。」女は蛇に言った。「私たちは園の木の実を食べることはできます。ただ、園の中央にある木の実は、取って食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないからと、神は言われたのです。」蛇は女に言った。「いや、決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っているのだ。」女が見ると、その木は食べるに良く、目には美しく、また、賢くなるというその木は好ましく思われた。

すると二人の目が開かれ、自分たちが裸であることを知った。彼らはいちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻くものを作った。

その日、風の吹く頃、彼らは、神である主が園の中を歩き回る音を聞いた。そこで人とその妻は、神である主の顔を避け、園の木の間に身を隠した。神である主は人に声をかけて言われた。「どこにいるのか。」

お前と女、お前の子孫と女の子孫との間に／
私は敵意を置く。／
彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。』

聖書⇒ヨハネの手紙一 5 章 19~20 節

『わたしたちは知っています。わたしたちは神に属する者ですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。』

聖書⇒ルカによる福音書 22 章 41~45 節 (SK 兄)

『そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。』

聖書⇒マタイによる福音書 27 章 46 節

『三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。』

聖書⇒ヨブ記 1 章 1~3、9、21~22 節 (KH 兄)

『ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。』

サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。」

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった。』

聖書⇒ヨブ記 2 章 4、6、10 節

『サタンは答えた。「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。

主はサタンに言われた。「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな。」

ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸も
いただこうではないか。」このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。』

礼拝讃美歌⇒490 番 (KH 兄)

『尊きかなわれさえ』

《建徳要旨》